

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00880

研究課題名(和文)アカデミックライティングに関する指導研究：参考文献の引用について

研究課題名(英文)A Study on Teaching Academic Writing: Citation Practices

研究代表者

大年 順子(Otoshi, Junko)

岡山大学・教育推進機構・教授

研究者番号：10411266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：外部資料をL2学習者が効果的に引用するには、Zhang (2013)が提唱しているように、引用個所を確認し(locate)、自分の考えと結び付け(connect)、そして学習者自身の言葉で引用を統合(integrate)しなければならない。この複雑で認知的に高度な能力が求められる参考文献の引用技術育成には、教員の明示的で、段階的な教授アプローチが必要である。この教授方法を授業内で実施し、学習者の能動的な取り組み姿勢を育成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学部の教養科目の英語授業からリサーチペーパー等をプロジェクトとして課して、学生が将来大学院やまた社会に出た際にも、問題を発見し、参考文献と関連付けて自分の意見を整理展開する、というアカデミックスキルの習得の重要性を実践研究を通して報告した。

研究成果の概要(英文)：To effectively cite external sources, L2 learners must follow the three steps outlined by Zhang (2013): locate the source, connect it to their own ideas, and integrate the citation using their own words. Developing this complex and cognitively demanding skill of citing references requires explicit and step-by-step instruction by the teacher. We implemented this teaching method in class and encouraged active student participation.

研究分野：英語教育

キーワード：アカデミックライティング citation practices EFL writing

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アカデミックライティングの授業目的は、Ferris and Hedgcock (2014) がまとめているように、各学術分野を共同体として、その中に通底する理念や表現方法を理解し、学習者が独自の思考を伸長して表現する力を養成するものである。日本の大学の教養科目の英語ライティング授業では、センテンスレベルの構文構築から始まり、パラグラフ、エッセイへと語数を伸ばして指導されている。しかし、上記に定義されたアカデミックライティングの意義を考慮すると、ライティングを通して学習者の思考を深めて表現する力を育成しているかどうかは疑問が残る。

また、欧米の大学とは異なり、日本語でのアカデミックライティング授業さえ多くの大学で必修化されていない現状を踏まえると、大学に入学したばかりの学生に英語でのライティング力の育成と、ライティングを通しての思考力の伸長を同時に目指すことは学習者にとって大きな負荷がかかることが推察される。

一方、文部科学省が 2018 年 3 月に公示した高等学校学習指導要領によれば、2017 年度より英語科目として「論理・表現」が開設されており、その目的は、国語教育と連携して「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成」とされている。この理念はアカデミックリテラシーの構築にも通底するものである。

2. 研究の目的

日本では 2020 年からの大学入学志願者学力評価テストに備え、思考力や判断力を問う論文構築力養成が喫緊の課題となっている。これに備えて、高校では「論理・表現」という科目が 2017 年度から開講されている。これまで、大学ではアカデミックライティングについては、英作文という形でパラグラフやエッセイの指導が注視されてきたが、「論理・表現」を学習した学生が大学へ入学してくることを考えると、これまでの自己紹介文や体験などの叙述性の高いライティングの課題だけではなく、より学術的で批判的なライティングの課題を課することが期待される。そこで、学部の教養科目の英語授業からリサーチペーパー等をプロジェクトとして課すことは、学生が将来大学院やまた社会に出た際にも、問題を発見し、参考文献と関連付けて自分の意見を整理展開する、というアカデミックスキルを活かせるはずである。

参考文献を踏まえてアカデミックライティング力を養成する指導方略は、前述したような言語面の作文指導と剽窃行為を避けるための作法の教授、knowledge telling に留まっているのが現状である。本研究では、学生のレベルや目的を考慮したアカデミックライティングの活動案を提示しながら、knowledge transforming の方略を探っていく。

3. 研究の方法

英語授業の中での参考文献を取り入れたエッセイライティング指導の研究

Petrić (2007) による 4 つの参考文献の役割(acknowledgement, distance, endorsement, および contest) を英語授業の中で提示し、それぞれの活用を促すアクティビティを開発して効果を検証する。データ収集としては、活動案に基づく学習者のライティングサンプルやアンケート調査、インタビューなどを含む。さらに、外部資料を取り込む際に頻繁に使用される“according to...”について検証し、その使い方の妥当性を評価する。

4. 研究成果

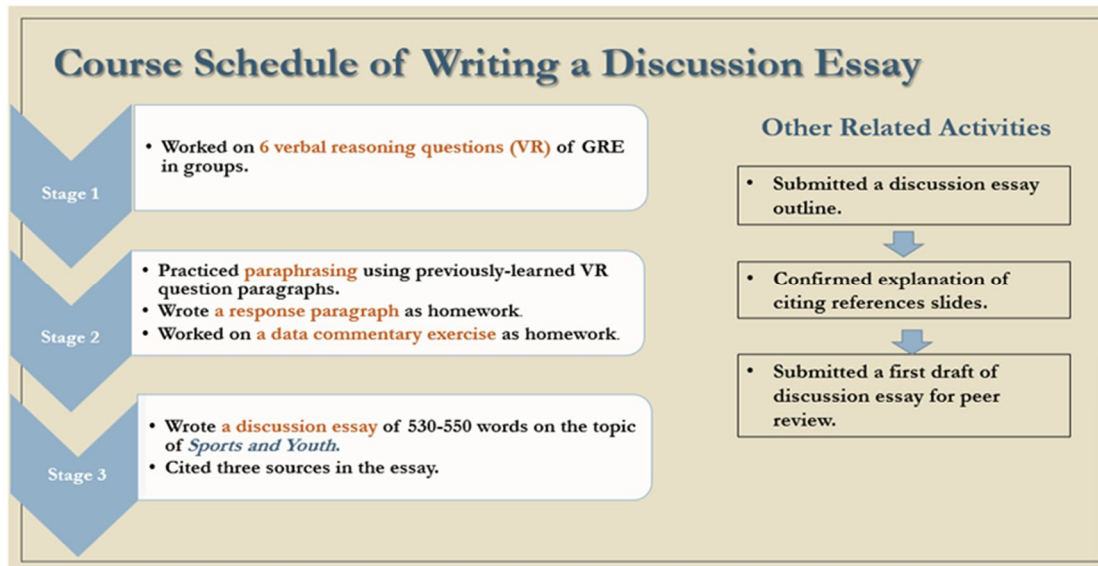
以下 2 点の成果をここに記す。

(1) ディスカッションエッセイ作成のためのステップバイステップアプローチ

図 1 に示しているように、外部資料を取り込んだ議論文を作成させるために、大きく 3 つの段階に分けて、それぞれに適切なアクティビティに取り組みさせて、スムーズに議論文を作成するよう指導した。

GER (Graduate Record Examination) テストの中の verbal reasoning のセクションは、受検者が与えられた情報に対して、信頼性を検討する批判的思考を測る問題となっている。これを授業の中で活用し、与えられた情報に対して一方的に承認するのではなく、批判的に分析できるよう指導した。

図 1. 議論文作成のためのアクティビティの流れ



パラフレーズや、レスポンスパラグラフ、さらにデータコメンタリー等のアクティビティを開発した。外部資料に言及して自分の言葉で言い換えて、自分の意見と結び付けるための取り組みである。各アプローチをクイズやアクティビティとして授業内に取り入れて受講者に課した。この2つの開発記録を、下記のように発表した。

Otoshi, J. (2022). An online practice for L2 source-based writing. *JACET Kansai Journal*, 24, 1-14.

(2) 引用表現の“According to...”の使い方と問題点の改善について

*According to...*は書き手の主張を裏付ける情報源に言及するおりに頻繁に使用される前置詞句である。L2 writerの多くは、アカデミックライティングの教科書に掲載されている本文中の引用例から、*according to...*の使い方を学んでいる。一方で、L2 writerが帰属するEFLプログラムにおける*according to*の使用の妥当性については、これまで十分に研究がなされてこなかった。そこで、実践研究を通して、大学の一般教養授業で英語ライティングを学ぶ学習者が、ディスカッションエッセイにおいて、*according to...*をどの程度適切に使用できるかを調査し、2つの授業で比較して検証を行った。ひとつは、上記(1)で実践したステップバイステップアプローチで議論の作成指導したクラスであった。

3名のEFLライティング教師が両クラスの39編のエッセイから抽出した*according to...*の68例の適切さを3点満点で判定した。その結果、文型と修辞目的の両面から適切と判断されたものは約34%、言い換えによって改善されると判断されたものは約50%であった。クラス間での統計的に有意な差は見られなかった。この結果から、本研究の参加学生が、*according to...*の修辞的目的を理解しながらも、文章中の引用を他の構文に置き換える言語的柔軟性を欠いていることが分かった。また、引用形式の特徴と外部資料の種類との関連についても検証した。この研究から、以下のような教育的示唆が提言された。

*According to...*以外のパラフレーズ力を育成するために構文力のトレーニングを実施する必要がある

本研究では、外部資料はすべてオンラインで入手していることが分かったが、その資料の信頼性を判別するアカデミックスキルの必要性が認められた。

自分の言葉で、他者の考えに言及するために、ライティング授業でリーディング教材をさらに取り込み、統合的な英語授業を実践する必要性が認められた。

この成果を以下のように論文にまとめた。

Otoshi, J. (2023). Examining the use of “according to ...” in discussion essays by university students in Japan: Is it a sign of academic writing or a lexical teddy bear? *The Bulletin of the Writing Research Group, JACET Kansai Chapter*, 15, 35 - 53.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Otoshi Junko	4. 巻 15
2. 論文標題 Examining the Use of “according to ...” in Discussion Essays by University Students in Japan: Is It a Sign of Academic Writing or a Lexical Teddy Bear?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要第15号	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐潤美	4. 巻 7
2. 論文標題 大学生の英語リサーチペーパーライティングにおける文献参照の一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第7号	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Otoshi Junko	4. 巻 24
2. 論文標題 An Online Practice for L2 Source-Based Writing	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JACET Kansai Journal	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Otoshi Junko	4. 巻 14
2. 論文標題 Analyzing Argumentative Essays Rated by Human Raters and Automated Essay Scoring: Focusing on the Four Elements of Introductory Paragraphs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要第14号	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 大年順子
2. 発表標題 高年次生を対象とした専門学術目的のライティング指導
3. 学会等名 JACET関西支部ライティング指導研究会 X 学術英語学会 共催セミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Otoshi Junko
2. 発表標題 Examining the Overuse of “according to...” in Discussion Essays by University Students in Japan: Is it a Sign of Academic Writing or a Lexical Teddy Bear?
3. 学会等名 The Writing Centers Association of Japan (WCAJ) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Otoshi Junko
2. 発表標題 An Online Practice for L2 Source-based Writing
3. 学会等名 Hi JALT 2021 Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大年順子
2. 発表標題 Analyzing the four elements of introductory paragraph written by first-year Japanese university students-action research
3. 学会等名 JACET関西支部ライティング指導研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	五十嵐 潤美 (Igarashi Masumi) (90711622)	岡山大学・教育推進機構・講師 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------